

1923年(大正12年)〔19歳〕

「辰雄日誌1923」No. 3 (4)

——1923年12月1日～31日——

小池辰雄

○1923年12月1日(土)

晴。僕の心、朝日の如く、朝日に向かって深呼吸をなしたときの快さ。

忘れろ、棄てろ、Humble〔謙虚〕、Pure〔清純〕。

僕の身体を癒し、強健にするものは、薬に非ず、栄養分に非ず、己れの身体そのものなり。元氣よく、積極的に、総てが信頼に。もつとも自然に、拘泥せずに、ゆつたりと。

神よ、12月は来れり。神よ、我が救わるべきときは来れり。願わくは、聖手によりてしっかりと御導き給わんことを。深く深く主の御心をうかがわんために沈黙に、実行に。ああ、全身を主に投げ出してゆだね奉らん。

○1923年12月2日(日)

晴。忘れろ、棄てろ、Humble、Pure。Jesus! Alleluia!

母上から、「姉の」赤ちゃんが生まれた報せを戴く。30日であつたとのことである。11月3日に生まれるべき預言が、3に10を付けた30日とはどうしたことか。11月最後の日に。女の子が生まれたとのことである。何だかそんな予感があつたら果たしてそうであつた。男児の生まれんことを欲したが、女でもよい。本当によい。何も云うことはない。有難くある。我が家庭に花が咲いたのである。感謝の外に何があるうか。

○1923年12月3日(月)

晴。寒いが実によい天気。キャッチボールをやつたあとで、自転車を30分駆つた。入日が実によかつた。千波湖の水がきらきらと輝いて流れていた。星が寒い空に冴えたり冴えたり。冬の貴いところはこれ。頭をちじめる人々よ、仰げ。

○1923年12月4日(火)

晴。今日もまた天気。キャッチボールを夕方やるのは何とも言えぬ気持。その空気、最上の食物なり。その運動は実にこれに美味を添えるものであつた。試験が近づいて来た。何もかも善。我は歩まん主の道を。



○1923年12月5日(水)

晴。実によい天気。

忘れろ、棄てろ、Humble、Pure。

これが汝の旗印。耳朶にひびくこの天来の声。なんたる清き音楽ぞ。我が罪を悉くぬぐい去り給え。信仰のみ。すべてを。さらば主よ、東京へ帰るまでの残る15日を、我が心のために、我が身体のために、働きて益あるものとなさせ給え。その結ぶ実の正しく且つ美わしきものにてあらんことを。5日の夕、キャッチボールの後、入浴の前。

神よ、これからこれからと云う信仰うすき我をゆるし給え。今晚、よき勉強をなさしめ給え。明朝、断食せしめ給え。アーメン。

今晚の10時のお祈りに本当に御力を感じしめ給え。

○1923年12月6日(木)

曇。寒天。哀れなる我、罪の我、とらわれたる我、不徹底なる我、1923年は逝きなんとす。

○1923年12月7日(金)

小雨。1923年、将に去らんとす。残る日をして我に益あらしめよ。クリスマスをして、清き楽しき心を以て迎え得る様、その日まで導き給え。我が飛躍の日、それをのみ待つ。御力をそそぎ給え。全身澆刺たらしめ給え。

○1923年12月8日(土)

晴。今日はどうしたのだから、春の日の様に暖かい。汗が流れるほどであった。2時間しかないところへ、先生が休まれたので1時間で終り、幼稚園の様である。

忘れろ、棄てろ、Humble、Pure。

○1923年12月9日(日)

晴。早起。医者のところへ。生命保険の身体検査のために行った。帰って朝食を認めた^{したた}。尾田先生から何日だったか、絵葉書を戴いた。御多忙の先生、小さな僕のことまでも思いうされ、ロンドンから葉書を寄せらるるとは恐縮、感謝の至りである。その日、認めることを忘れ、今日、不図思い出したので認める。「Law Court & Fleet Str. London」絵葉書である。感謝なる日曜の午前を過ごした。最もよきときである。

○1923年12月10日(月)

雨。細かい糸の様な雨が降りつづいた。安息日の翌日は元氣旺盛である。一週間の精力を与えて下さるのである。勇みて一週間を歩み、而して安息日をまた戴く。故に安息日は



楽しく待たれる。主のこのためにまた、安息日は更に楽しい。この世のことに非ず、我が望む国のことを学ぶために。僕の机上の額に、“The Good Shepherd”〔善羊飼〕の絵葉書が挿んである。実によい絵である。僕は思う。この絵にある如く、エホバ、我が神は牧者にて、僕自身は彼牧者の右手に抱かれた羔であると。傍なる母親がエホバの御手にゆだねたのである。実に、

“The Lord is my Shepherd, I shall not want.”

「エホバは我が牧者なりわれ乏しきことあらじ」(詩篇23・1)

である。今日、神にお願いする。それは僕の心のあやまりかも知れないが、このおねだりを聴いて戴きたい。

12月22日	9貫500匁	〔約35.6kg〕
12月31日	10貫	〔約37.5kg〕
1月7日	10貫500匁	〔約39.4kg〕
1月20日	11貫	〔約41.3kg〕
1月31日	11貫500匁	〔約43.1kg〕
2月15日	12貫	〔約35.6kg〕
2月28日	12貫200匁	〔約45.0kg〕
3月20日	12貫500匁	〔約46.9kg〕

かくならんことを。今日までのすべての罪、過をゆるし給え。申すことは山ほどありますが、神、よく知り給う故にただただ御赦しをのお願い奉ります。

「¹²信仰の善き戦闘をたたかへ、永遠の生命をとらへよ。汝これが爲に召を蒙り、

また多くの證人の前にて善き言明をなせり。」(テモテ前6・12)

○1923年12月11日(火)

晴。忘れる、棄てろ、Humble、Pure。大きな心を持って、ゆたつたりとなれ。子供の如く無邪気なれ、

“The child is father of the man”

「子供は人の父なり」。

○1923年12月12日(水)

晴。今晚は寒い。弦月が冴え切っている。水晶よりも清浄な光を星は放っている。試験勉強という無意味なるものをやらねばならない。桐寮にもその妙な寂けさが襲うて来た。先生方も僕の身体のことをたずねられる。無理をしない様にと言われる。僕の罪より得たるこの痩せた身体に対して

「この馬鹿者め、慾を離れてしつかりしろ」



と叱咤してくれる人は居ない。今日は義雄さんの誕生日である。また、彼等に会いたくな
った。今度会うときは余程大きくなっているだろう。

○1923年12月13日(木)

晴、夜雨。起床8時15分前、大車輪で支度して、おみおつけを一杯呑みこんで出掛けた。
午後の体操をやりに出掛けるときに葉書が来た。兄上から。兄上の試験発表、16名中2番
とのこと。

「お目出度う、その勢いで大学の試験を突破されんことを」

と、兄のために思わざるを得なかった。

忘れろ、棄てろ、Humble、Pure。

信仰の善き戦を戦え。何事も思い煩うなかれ。祈れ、感謝せよ。

○1923年12月14日(金)

晴。信仰の薄き者の生活は此の如しと思わせられるところあり。慙愧に堪えず。

時間と時間との間、皆が教室のムットする中で試験のことを話したり、くだらぬことを
言って騒いだり、煙草を無造作に燻らしたり、ストーブにかじりついている間に、広い広
い運動場へ出て寒風に吹かれ、日光に触れ大気を呼吸し、遠くの山々を望み見たり、近く
の豆科の植物の萌芽しているのを見たりするのが僕の好むことである。豆科の植物の如何
に愛らしきことよ。愛すべきこの自然物を知らずに俗塵に耽溺している人々の不幸さよ。

武田の叔母様から絵葉書をいただく。僕の身体のために祈って下さる。母上様からも、
愛にあふるる御音信がある。御自筆を戴いて涙を催さざるを得ない。毎晩10時のお祈りに
母上のことが第一である。神よ、母上の肉眼を願わくは活かし給え。これを思つて自分は
不心得なことをなすことは到底忍び得なくなる。健康体に復して、母上をおよろこばせし
なければならぬ。虚弱である間、汝は不孝者である。神によりて沈着な人間となれよ。

○1923年12月15日(土)

小雨。あわれなる我。心をおだやかにせよ。汝の精神は異常を逞している。汝は明朝、
断食せよ。神は爾しのたまか宣のたまい給う。

「⁷わが靈魂よなんぢの平安にかへれ エホバは豊かになんぢを待あしらひたまへば
なり」(詩篇116・7)〔英文〕

○1923年12月16日(日)

快晴。安息日。夜はよもすがら泣き悲しんだとも、朝には歓び歌う。今朝の如何に美わ
しきことよ。神は断食を命じ給うた。僕は快く聖旨に従った。



Cleanse our bodies and souls, our hearts and consciences, that with a pure heart,
and a clear soul, with perfect love and calm hope, we may venture confidently
and fearlessly to pray unto Thee. Amen.

「我等の身体と魂を、心と良心を浄めよ。純な心と明るき魂をもって、全き愛と静かな望みをもって、我等は思い切つて、確信をもって懼れなく貴神の中に祈り進んで行けます。

アーメン。(編者訳)」

お昼は美味しく戴いた。しかしそこにもサタンが居た。2杯で止むべきところ、つい3杯と食った。それはたしかに胃のためによくなかった。舌は非常にあれた。また今日は今夜のジャールが^き験きすぎて頭がぼうつとして困った。晩は如何にすべきであるか。神は宣い給う。

「信仰うすきものよ、迷えるものよ、イエス・キリストの断食を思わざるや」

と。今晚は節食致しますが、未だ徹底していなかったことをお赦し下さいませ、神よ。瞬間瞬間を総て主に任せ奉らせ給え。亡びに歩みつつある私を救い給え。

明日より帰京の日まで、日記を記すことも禁じさせ給え。ただ愚かなる私を救い給え。私は黙して聖旨をうかがい、それにしたがひましょう。愚かなる私の口を閉じしめ給え。心を働かさざらしめ給え。全く無力のものとなさせ給え。うじ虫よりも劣れるものと見給え。世界中にて最もひくきものと見做し給え。而して、私は神の愛を最も深く見ることが出来るのであります。それで救われるのであります。神よ、私の的には力がありません。頭も働きません。どうぞお赦し下さい。アーメン。

○1923年12月17日(月)

快晴。第2学期の試験が始まった。歴史と英語。先ず無難に済んだ。一日でも試験は済むとホットする。勿体ない様なよい天気である。夕飯までの勉強は身につかない。11時半に消灯。

○1923年12月18日(火)

晴。数学と国語とグンデルト先生の独逸語。数学は赤丸らしい。国語はちつとも勉強しなかったため大失敗、青丸かも知れない。落窪物語なんか僕には腐敗文学としか思えなくて勉強する気にもなれなかった。独逸語はかなりよかったつもりだけれども、まだまだもつともつと勉強の余地がある。

日当たりのよい縁側に試験のことも忘れて、蓄音機を聴きながら寝ころぶのはよい気持である。実によい天気であった。辛い勉強を12時近くまでやらなければならなかった。四郎ちゃん、宣ちゃんと向かい合いで3人で。隣の室では林、その向こうでは芳賀。試験の沈黙が守られる時間の寂けさ。5人は時々、無理にもそれを破って話しだし、次の勉強に



精力をつける。或いはお茶を呑んで気を休める。10時をすぎると、骨に徹る様に寒い。一人寝、二人寝て、あとに残る者ほど心細いとは銘々の所感の同じうするところである。

○1923年12月19日(水)

快晴。独逸語(読本)、漢文。独逸語は満点と云つてよい位に出来た。漢文は並みであった。三日がすんでもう試験は終わった様な気がした。つくづくいやになって夕飯までは昼寝や入浴ですぎた。くる日もくる日も実に好い天気である。月も段々よくなる。オリオンの空が展開されるときとなった。

○1923年12月20日(木)

快晴。自然科学、修身(1、日本国民性の長所短所を列举せよ。2、環境の人の品性に及ぼす影響を自己の経験上述べよ)。修身の問題は頗るよい。ノートを見て行かない僕には至極有難い。修身の問題は須らくかくあるべしである。明日帰京というので、今日は帰りの支度をした。今日が最後というので深更2時までガンバッタ。問題は如何と、準備はますますよしと眠った。

○1923年12月21日(金)

曇後晴。独逸文法、100頁に余る試験2時間。案外な問題で、先ず先ず上出来。1時間ほどで答案を書き上げて出して、扉を排して出てくるときの快さは言わん方なしであった。霽れた両眼は田舎の広々とした景色にさえざえとそそがれた。学校のことはすっかり頭から離れてはじめて自分にかえった心地がした。帰寮後、支度を整えて、水戸駅へ足を運んだ。僕と同様、気の早い連中は相当居た。12時13分発車、東京へ向かった。薄暮、帰宅した。入浴したあとの気持は何とも言えなかった。

○1923年12月22日(土)

雨。連日の好天気も今日は雨天と変わった。よき休息の日を送った。兄上の今年最後の御命日である。お菓子をお供えた。水仙を一株買って来た。鉢植えにした。母上様は御丈夫で何よりである。姉上様も産後の肥立よく元気で居られ、肋膜炎の病気は殆ど全快で何とも嬉しいことである。僕も丈夫な身体的所有者とならなければならぬ。来年から僕は運勢がよいとのこと(お陶宮)。それはともかく自分の心地がそう向いている。神経衰弱的状態なんか飛んでしまえである。望むことは、ノーブル「気高く」にしてシンプル「単純」にならざるべからず。



○1923年12月23日(日)

晴。讃美歌の声がして来た。聖書を繙くことを怠っていた僕の心を誘ってくれた。僕はお墓詣に行った。兄上の墓前にドツカリと腰を下ろして長きお祈りを捧げた。讃美歌を歌った。墓場は寂かで、好い気持である。家のお墓は本当によい所にある。兄上も御満足であろう。寂けき自然と共に。それから吾妻の伯父様のお墓へお詣りして来た。花輪が沢山飾られてあった。

富美子が居ると家の中は賑やかである。赤坊はおめでたい人である。母の務めも一方ならぬものをつくづく思った。5、6才の子供に育てあげるまでの骨折は非常なものである。

○1923年12月24日(月)

晴。生誕節前日。Christmas Eve. 今日はお使い歩きで相当疲れた。3里あまり歩いた。僕の最初のクリスマスが来た。しかし、近頃の信仰の墮落で感謝の心に欠けている自分を顧み、物にとらわれ、迷える心を思うときに、我れながら涙に咽ばざるを得ないのである。すべてはやはりお赦しを乞ねばならない。

○1923年12月25日(火)

晴。生誕節。Christmas. 朝5時半起床。久子さんの帰省を見送るべく上野へ行った。^{あかつき}暁に月を踏んで出るとは今朝のことである。凜たる寒気は膚に沁みるけれども、その味爽^{よあけ}の気分は何とも云えない。殊に今日はクリスマスである。その中に、団々^{かつかく}なる太陽が昇って来た。

午後から青木へ行った。母上を伴って。教会へ行こうと思ったが、寒風が吹き荒んで来たので、母上をお伴れすることは少々むずかしいので止めた。しかし8時頃、青木を出るときは静かになっていた。松仙堂で美味しいお菓子を五つ買って姉上のお土産とした。

実によく晴れた夜である。Holiest Night, Silent Nightの歌の日は今日である。その通りである。帰宅して、物干の上に昇って一人でこのクリスマスをお祝いした。煌々たる月と、北天の輝星座オリオンがクリスマスの何よりの美しき天のデコレーションであった。家の中では、ありあわせのお菓子と果物を出して、母上と姉上と二人でお祝いし、お祈りした。入浴して寢床した。

○1923年12月26日(水)

晴。山本へ行った。お歳暮として、義雄さんと隆さんに馬の玩具を、富美ちゃんにはマリを、姉上様には「フルーツサラダ」の大缶詰とお菓子、それにお約束の讃美歌集を買って行って上げた。姉上さが讃美歌を歌いたくなられた心を喜び、且つ信仰に入られんために僕が心からさし上げたものである。



夕飯も御馳走して下さると云われたが、疲れたので早く帰りたくなり辞して来た。支度をしたあとだったのでお気の毒だった。今日、山本へ着いたときが1時半、朝からお使いあるきで運動が十分だったので、お午の美味しいこと言わんかたなしであった。スジ子とシロインゲンだけが、これが実に実に美味しかった。御馳走はお腹それ自身が作るものであつて、品のよしあしではないことを感ずる。渴したときに清水、天然に湧き出づる泉に勝るものなきは正にこの理である。人工のアイスクリームもソーダ水も葡萄酒も皆比較なるものでない。

○1923年12月27日(木)

晴。武田へ行く。叔母様、御不快でお気の毒である。林檎を持って行つてあげた心をよろこんで下さった。伯父様、叔母様からお歳暮を戴いた。母上様、兄上様からも戴いた。今までの自分の全財産と合わせて神楽坂の安田銀行に預金した。『聖心』という書を買った。母上からとして。尾田先生が来られて、洋行されたそのお話を1時間ほど承った。

○1923年12月28日(金)

晴。晴天つづきである。寒気も例年に比して厳しくない。兄上、宇都宮から出て来られた。毎日、入浴している。目方が少しずつ増す様である。

○1923年12月29日(土)

晴。母上と武田へお見舞に行く。よほどよくなつて居られた。青木の喬さん、陸軍大学の試験に不合格であつた由。誠にお気の毒である。元氣よく、

「伯母さん、落第しました」

と呼声して来られた。あとで、青木の叔母様と実様が来られた。斎藤さんから琉球のお菓子なる珍品を戴いた。美味しかった。

○1923年12月30日(日)

晴。丸善(九段)へ本を買いに行つた。

“Wordsworth's Poetical Wopiks” Oxford

“Tom Brown's Schooldays” Thomas Hugh

の2冊と、日記帳の第4巻とを購つて来た。好い詩集と奇麗な本が見つかつて嬉しかった。

○1923年12月31日(月)

晴。大晦日。今年最後の日である。大晦日である。僕は今年を追想して見る勇氣もないほど哀れなものである。総てを神の前に告白してお赦しをねがわねばならないのである。



健康々々と言って遂に健康は得られなかったではないか。
信仰々々と言って遂に己れに真の信仰がないではないか。
語学々々と言って遂に英語が進歩していないではないか。

この不徹底なウジ虫め。何と罵詈をあびせかけられても一言の答うる言を有たぬこの身を如何せんである。涙も何も我が罪を購うことは到底出来ぬ。牢獄につながれているどの悪人よりも勝りて大なる罪人は僕である。

1923年の終りの日に、最も力をこめて神様に申し上げて、お赦しを乞わねばならぬことは正に之である。大なる罪人のすべての罪をお赦し下さいませ。

母上様と共に入浴して、背中を洗って戴いた。就寝前、母上と共に祈りした。

